藩鑑

百五十八

上杉

内閣文庫

内閣文庫			
和書	三四六八二	二八〇	一五八
類	號	冊	函
			三四
			架

内閣文庫

番號	和 34682	
冊數	278(158)	
函號	159	1

国立公文書館
National Archives of Japan

388

藩鑑奏之二百八十八目録

う部十一

上杉彈正大弼藤原輝虎

国立公文書館
National Archives of Japan

藩鑑巻之二百八十八目録

う部十一

上杉彈正大弼藤原輝虎

国立公文書館
National Archives of Japan

藩鑑巻之二百八十八

上杉彈正大弼藤原輝虎

一 謙信小田原の城連池まで攻入り明日八幡倉に郡〳〵と〳〵軍評定ありしとき彩発田周防守治長ところ十六歳なりしが進み出てかゝるべき所なゝハ一定味方敗北せへしと中せ謙信怒りて右の柔なるまゝに物か

云々といへれしかハ活長居直り酒てゝ
ゝ君臣ハ酒を絶せ給ハゝひるハハ国家に馳
参り北條氏ハ先陣して君と逆討まゐ
らへし酒匂川ハこなさにてさたやすく討
取奉るものゝとゝ中ハ義信そゝき色と和
らけ行つゝれ割ハ者よ神妙にもやしうう
なる明日の後敬とせよと命せられけゝ活長
軍立ちゝらへさとゝ帰て事ゝ小田

原と引揚しゝ　常山紀談　古実活　武功要名秘録

一　永禄二年二月上杉謙信輝虎ハ鎌倉へ入
給ひ鶴岡ハ神奉にゝ当領に住ゝ給ひ
関白奉久ゝ下向公方義輝ゝ大和
中将ハ補上使ゝ下ゝ関東の大名ハ
名列座ゝ時ハ千葉介國胤ハ山政種
と座ハ論あり謙信ハ給ひくゝ千葉ハ
関八州の法ハ上たるへし小山ハ関八

別代諸士乃下へかゝる仕と裁許可し
に〻事ありまつるとい徳信當主即妙の戈
寛永りと天下拳てこれとほめしまう

武家必定書
武家閑法

一 永禄之年間十六月鶴岡八幡宮に社参の
其しるき示爲憲政の老臣大石白倉長尾
小幡等奉従して八幡宮に諸士と参して
神前に右列座し當家備代に諸士八名か

甲冑と帯して辻小路と騒乱落し非常
と禁ずること〻厳重なりかゝる規式整こる
為小武蔵國忍の城主成田下総守長康神
前小をいく警固に武士く當座の口論を
仕出し雑乱に及ひ騒動に事可公これ
と安給ひて大小忍り神前を憚らずして
いと殊に近所後市社参いとかゝ次く
長康り行跡奇怪なり如何相後日に乎沙

活路へしと大に怒り給ふ下意なる色と共
に以外恐怖し後難の如き事へらさる
事とそうもと一性の陳謝にも及ハす俄に
虚病と称へ己か居城忍に引退き源信公
此事と共に石れ迷に忍へ去をさしむけ彼
と決戦せんと欲し給へとも今度こそ社
糸家の神意と悟りてをまさし歎るに
後程に成深深あるをそれい一旦ハ公軍門
に来たり集りしも関東に活路容しに去と
引て留己こう不便に退散せ孫信も戦後信
波に人数と率ひ孫倉と立く上州平井
へ到着し此表より帰国して六月
二日に帰国し給へり扨さに此事源信
公大軍と率し小田原城下まて押詰る
といへとも氏康い勢龍の如とふし固く
籠城して源信公に去と交へせ氏康乃

謀計と考へ、武田信玄織田信長の右將
及び越中花彈の小舟の士大將へも賜し合
せて越後の国を伺ひ変に依て各之方
四方より越後へ乱入せへしとあり、さに依て信
玄二万騎を率し信州稲井深に屯せ
信長も北陣の内觸と廻し越中の神保
正氏に命じ越後国を伺ふべしと氏康の
計略い氏康能城のをいてを頼信定

りて小田原城と圍て攻戦ふへしいうれと大
勢にて富城と攻るといふる文十日や百日に
落城せへ〳〵中を門信玄ハ信州より上田坂
本と迄て越後にて〳〵さ入信長ハ越中よ
り越後国へ発ぜへし氏とさハ定て頼信城
とまさほくして勢と引揚へし氏を引ぬに
除して氏康能城の勢二万餘騎と率し
実に〳〵雄雄と一時に決せへしとあり頼信

諏訪方に謀略を案せしるに依て城を圍ませ
しく鶴岳へ糸清水方に糸清水方小心小氏康
若人数を出しく社糸井場へ押来るに
をいく小速に合戦し大勝百人にくも
一戦に討ちらしを勢ひを以て直に小田原を
攻るうしく小攻へき変をく小城とい元亦
いよく小田原迫る地を略し小原に山
内関小甘利虎泰を大将として戦後清代

の人数一万騎に関東の諸将を相属し二
万の人数にくたるに小田原をとをく
諏信小戦後へ帰国ゆう小二月に相定め
八幡宮社糸あるしかり戦後諸々吾甲冑
を帯して警固と成さしめ隅田井上乙
賀寺に梨以下小人百人百にく鶴岳迫に
忍び居て小原元押来ると待居ゆう氏
康まさ富代の良将ゆへ小計略を知て

人数とゝさせ密に用士と以て成田口
論の事ゝとゝかせそこいへり徳信此度大切成
ゝき事ゝと思量し速に去ゝと収りて迫度
と奥足し奉ると鎌倉ゝと発しゝく上野ゝ
平井まゝく引取れゝり此度も小田原迄ゝ遣
きゝる事ゝ行へしゝそ材清和泉ゝる新発田
下野ゝる長尾小四郎等に命しゝく共まゝう
けゝりゝと以ゝる氏康諸軍ゝと制して

城ゝ一人も出されそゝなり此度徳信氏康
ゝ配立小田原にゝく也越後にゝく也互に風説
ゝそゝいへり　春日山日記

一
徳信上洛せしゝく欲しゝく先武田信玄へ使者
ゝ遣ハしゝく曰ゝく徳信都へ上り公方義輝
ゝへ出禮申ゝ以但し其間ゝる門氏方の持ゝ
へゝたゝゝき給ハゝ上洛ゝおもひゝまゝり申
へゝさゝるゝ公方への成私事に行ゝそれへハ信玄

も公方へ対し奉れ我国さへたゝかれ
さらハ平家なりとも上方へ信玄はせ
き方上洛乃国さる中ハ特分此地へ遣ト
ゆゝしき此事なり頼信氏賀約したまふ
奥義ハ信玄と壓へ方国人衆と小田原へ心易
くなたらせ小係氏康と仕つれたり
深なりさく二月に上りく上洛は備はへ
数定めなり　戦後軍記

一　永禄二年頼信公総勢二千八百ばかり此小
物と右連れられ路次敵地を行
市乗遣ひもなく上洛なりく系図と遂ば
龍飛と絵し天盃と載さ物語を以て号
刀長光英に卯子は香合に薫物又種
と入下され次る又公方義輝公へ御礼関東
管領職四光乃以来下英に来は来都と
賜ひ輝の一字と下され政虎を輝虎と改

め給ふ旨を以て底意を行ふべく以所作と
られ永禄六年まで小政虎と名乗ること
右代時節五方代執権之好左京亮義継
ゟ遠藤伝公将軍家へ何候のときひ家故
代度上に着給ふ内ひハ途中にて義継の
使者にまひ馬上にて返事成て途中にて
松永弾正ゟ遠給ふときに松永ハ馬ゟ下ル遠藤
公馬上にて代扶持を乞ハ微妙の以奥意

ハ以武勇の段所存 管窺武陵

一 六月十日遠藤公城後を発して上洛した
まふを聞て合戦千騎ばかりかねて武田信玄
へハ義深未女正と使として以遣給ふ
者内ゟ後甲府ゟも安房常刀と云
と使者に元城ゟ遠藤公発生の赤日ゟ
を四之楽と石くく客有と合ゟ面ゟ中仕
並等をこゝゟくく今と下ゟ公の若代ゟ

く宇佐美駿河守と春日山城に居住しあ
給へ武田小隊の製来件備と歳末にあり
給へ　春日山日記

一　謙信公八月軍勢をひきゐて上洛せ
れ六月廿八日京着し七月七日に公方義
輝公へ対面し参着細川右京大夫藤孝
を以て献上物一腰馬一疋馬代金三十
枚毋五及び一条院麻苑院へも進物し公
方上意に小隊退治仕たため称賞と盡されま
さを休暇申され直に甲斐の上洛感
悦の旨仰せ下され次後関東の管領職に付て
有道順理に改と施し廉直仁徳政と為し
といふを聞へしと奉けなくも御輝乃
字と賜はり輝虎と稱せ之綱代仁乗を
免許あり亜に文の裏書に評申されし輝
虎謹て拝戴し奉りていく末一生の中

に云遣れ國々と攻傾け天下の諸侯もそれ
京師に来勤せしめる氏卿乃ち治世れて
四海悉く一統に至時れ掌握れ中に帰し
りんと欲せ是我素懐なりといへり公方様
召れ御感斜なりけり當時紀州せしめ
依く早く帰順と給ひなる時は輝虎細川
義孝と以てひそふ言上せられけるハ唯今之
好使理大夫長慶り紀州を案出するに逆心乃
企あり事孔急なり来春上洛せり預く
ハ歳余を経ずして速に三好長慶同筑前守
義賢同左京大夫義継等と討亡さんと云
云方々一百余騎三好長慶一族等り逆意いま
し露顕せ紀州の上発覚するにをいて
全く余せしるへしと宣へり輝虎いまた
災害発らんと若ひしりも強く言上せい
彼と流すに似たるゆへに全く謀事に

小陸道を経て江戸へ送り　戦後年記

一　源信上洛して糸間したりしに厳蔵殊に浅
からず　長光の御太刀に黄金作の香合に薫物
を入て下し給ふ又将軍家へ糸ゝにまた
源信の座と當時の執権と好左京大夫義継
り上にまうけらる鶴丸直垂に糸の再
拝をとゝへて給はる管領の職をゆるされ又
塗輿をゆるされ諱字を下し給ふ　義貞記　義貞記

小田原記

一　源信上洛のときは松永弾正忠義たゝと好
長慶といさめ洛中には宿せず北白川大津に
居られけるをもつて公方義輝公御一字下
され輝虎と号たし源信若さときは果虎
といひ上杉憲政の壊りとうけて政虎と
號し此度輝虎と號し幕内紋一は菊桐二
は沖鴨之に加れ紋と御先祖代々無と文乃

裏書には元にく管領職と給まる永禄二年七
月九年なりを年中に二好長慶より馳走
なりを年中に二好松永わたくしれ威
と振ひ公方となりいろにまると見てその
年十二月に譜伝れ帰下され戦後小かへられ時
公方義輝ゑへひそうにゆ上るれは二好松永
り謀叛の色顔は見えは若逆人の紅色には
ハ、早く御門書とゆ下さるへし輝虎馳上り

こ好松永と譜代仕りへくけくゆ上る義
輝ゑは威にくかるく四海来これ行りは中こ
年元ゆ永禄七年七月七日こ好長慶河
州若江にく逝去はへるる松永弾正こ好一
類と相談してかるく陰密仕は翌年春に
なる長慶逝去れ事ゑ方の四年に達しゆ
も義輝ゑ大和ゑ郎四使仕るく戦後へ遣ま
ゆれ長慶死去仕はる旨上洛仕りこ好松永を

遷治仕へくとの所用書なり輝虎上洛の文
度ひらし之好義継松永弾正成等これを受
孫伝上洛ひらしハ叶ふへからすそうもなや
くおもと達をへしとそれよりひしくと
ト談し沖而へ打よせ義輝公と戦し
きりける　武家之盛衰記　古渓實孫

一　累虎上洛これをき公方義輝公宣ふ京虎
ハ若年より弓箭をとるとく武名世に知
らさる者なし　抑前古伝に長尾我部元親の
敵上せし猛き猿ひらし世に稀なる猛獣にて
檻ふ入れ飼ひとりつく檻を色々しく京虎出
仕の砌をと檻より出し酒次ふつかさ主京
虎う勇と成しとひらし猿ひ酒ひ人を見
てハ必ずを牙を鳴ひしく躍上り叫ふ姿
をさまりき事なり此猿と次く京虎と
戦み給ふへき事酒中に出えれハ世の人皆

来虎之仕れ日と侍く見相せ来虎ハ活中に
間蝶と走け走ハ此事とてやく岡付とる
れ士鬼小海ハを部とハ大力の云に下知して
順禮れ所にうくさせ猿れ海食を持せ彼檻の
をへ遣ハせに鬼小海性来れ人にすしもう
者不に之付来士小語并り坪乃猿にちう
つくに鬼小海と見付く牙とをくしおめき
さけハ来と鬼小海海食を知し先と共ふる

に猿まうこをくを喫こて之度にく猿こ
とれ外静まりうとき又海食と檻れ外ハ
是来に猿見く桔るまりるとおし食を取
んとも鬼小海ハ来双れ大力にく去年戒府性
来れ橋を性理せに之十人持の大木と性く
く拳たるゆへ世の人鬼小海とハ形れ如さ
れ大力ゆへ猿のをを乱生とくへ桔る乃
角来ハ雅富ちくうとすり付とうに大

力に痛められ猿ハ涙を流し苦悩し鬼海
ハるゝと放さるゝ時そうの痛めしるに猿弱
まて地に伏しく帰さるゝ鬼ハ鴻ハ旅宿
より還る翌日京虎公仕れとき鬼ハ鴻例に供
せる酒中れ貴機京虎ハ猿ハ逢しる別膳
と見れとく辞聚し公方家れ諸士も京虎
公仕れ解又ハ猿れのうさまと見れとも皆
何候し京虎ハ猿れ京と徐こと逢るに猿ハ鬼

小酒と見知るく恐怖しるる有様にく地ハ
伏るる鬼小酒ハ猿をにるれて逢るるに
猿頭と低るく平伏し公方も管領も二好一
門も奇特れ思ひとゆ此京首尾よく退
出し帰るれけるに公方とはすめ申し細川
右京大夫殿之好元方も慶伝ハ京虎ハ若
年より馬の道に心をよせ禮儀ハ知るへ
きとおもひに公仕の解祢ゆすると稱美

いつまでと云へり列ちて方義藤將軍家へ沖
月見沖太刀馬鞍後胴丸黄金小袖等進上
あつて史より勅命によつて宗尭に宗門昇
殿と宣せらるる能新と拜謁して天盃と
頂戴せ
主上帝くも宗尭と懇に馳走沙汰せられ
勾當門侍叡慮の趣と廣橋權中納言に仰付
られ國光朱雀頭る英と畫せ次に

禁中殘らず拜見つて退出日と經て又
倫有と下さる廣橋大納言光と仰ふ小條軍記
一 謙信公は上洛を法にて家光卿評議に當
春謙信光と成されいへ小條を通例
しかへしに自然勝利と矣ふる通信に
留義ようられは而ふて問答を完め右田に樂
ハ関東表を相語られ弧後にくハ林泉稽
直江小條平庄村上等とはしめ武州へ行て

出之樂所と一つまゝ法方ハ敵城に押
と立憲政ゝと想大將に取立二万八千乃人数
と決て相州へ発向し菊川と共に當酒匂陣
とゝ明日小田原入と中定むべきと房州ハ
里見義板倉牛書正木左近等に上甫下出さ
相州金沢城と糸取り又下総ハ千葉成の
居城佐倉へハ正木大膳に山本彈正ゝ老
功の士大將副と成ゝ押詰る形の如さ

義氏康より又信玄公へ種ゝ頼給ふと以ゝ
信玄ゝ戦後へ出たらかたたゝ信州へ向ゝ
北條氏と酒匂ハ吾安て戦後と氣遣ひ
引とゝ此ゝ信玄公も甲州へ軍と纏めらゝ
ゝ 信玄武陵

一 永禄二年八月謙信公ハ國ゝ給ふ同九月面
ゝ戦ゝ立たゝふ老中と云ゝ今度上京
中の事を頼ゝ給ふ且面ゝのうち戦後のや

うもと一し尋給ふ老中委細に對へ奉る若
し謀略はほとを感し給ひ他中古田乙樂の
忠節と褒し給ふ此ついでに客体居ること
浅し給ふ他きとも老中の外是を知る者
なし後日記小面り生れしく乙樂と始め
今度面目に残し重ね老臣小笠原長常と
給ふと云へ同十月頃信公宇佐見駿河守甘
粕迫り直江山城守彩発田柿崎加治隅田

以下は老臣と云へ軍議仕へと評議し
給ふ若退去の後駿河守独りと面り信玄
寝所に入へ信玄将は籌策と決議し給ふ
と云へ　春日山日記

一　永禄四年四月十八日頃信公信長と云へ
い上吾果年信濃表に出陣ありといへる時
信玄と戦ハ人事と欲せはいつも晴信彼ら
れさるは備と奉し同くすへく変陣なし

如何しく彼と戦ひく勝利を得た例年の如
く吾謀議と紙面に記しく捧くしを吾
業につきて事と渡せんと宜まへり拝受一
同に命とかりしく退おもてと云と或説にい
くく今度遠征帰国して留る中の事第一
小田原への計議を既に次第妻細に見とはく
始して老中に面ひくいたく吾今度上洛の
御軍使として晴信に告くいたく此度上洛

もることと私用にかくまて通商度と奥見しを
る見一つさていい将軍義輝云へ拝謁のため
見二つ家康へ将軍家通商度へ禮儀と存ち
にをいくい遠信云上京に駿河遠江中
云と戦後へ申ちく事かへくまを若此後
同意なくい吾此度の上洛を留るへしとなり
とさに晴信返言に云方通商の面倒を略に
存し奉らさる後信云ともく同事なり戦

因て中関白殿より使あり上洛の上洛良り
盛せへきなり然る上は驛路に来住奥に至る
数十日といへども甚く戦後にいたるへき
也 此後氣遣ひなく上洛なすへしなり然に
今度川中島へ出馬し一度弾正と魁仕
らく吾國境へ出たるく事云語同所云
恨て次第なり最前に使を遣る事とい
第一云方迷惑あるへき事禮かなり以て此恨と散
せ申へいなるへ然なれ上ハ當年光源
信玄と有之に合戦を遂へし各存寄不あ
ハ一事も殘らず申談ぜんと思ひて面に一
通つゝ書上へきとあり光中此旨と申て退出
申と云々 同上

一 永禄四年甲州穴山梅雪より戦後北庵龍
華寺まで空蓮と云僧を指越さる之趣
御ゆへなるにより信玄迎来給候に付て即武信

と押下し廃子伊奈四郎と立合仕られ
候累猶やまず弟楠丸機をもて敵対
さいへい源信公義信と養子に成され取立ぶ
しいたしといてい梅雪と連れ戦後へ敵へ
し伝玄家中にも宗徒者四人も義信と引
中半ば度いを更科より取續け信州へ大
ゝ切くに入中へくいり乙多年の積重り
にい戦清を本地へ仕居給ふ計策の調達す

との口達ゝ源信公逆賞の法角喜介本郷
八左衛門等七組の者共に相談せし七組元乙ハ
大吉事にい甲州と諸ゝ術ゝ便り有ハ早ゝ
被露仕ゝれ乙ゝ行るにより西人共お委細にゆゝ
源信ゝ信ゝと乙へ百ゝしいへ直言せるへゝ
作小疑ひ押付空菴に前に猶ゝ源信作ゝ
に場能ゝゝ梅雪にいゝれ以へ戦伝の役と立て
信州ゝとゝれゝ戦源信合戦中させられい

老邪と存ずるにをいてハ人々ハ皆ますますいよ〳〵
信ハまかくいへハさも行へし梅雪何そこれ
不とうつけしる言葉と生さ成はや身の奇
耐おさほとハ頼み入とはいへ孫信行とく意外
ハへくやはり場の悪敵に対して今度を無事
に帰せとそく云〳〵れしとはいはそはらと白服
給へハ空菴色と変り死なるる　杉浦板垣
一　永禄四年七月甲州より孫信ます入来れし

間者ども駿河より信州に心ある者
数多ありを八月上旬信玄川中島に引き
て死罪に行れ是に国〳〵疑と生ずる者多
し又和利の嶽に軍に士卒多〳〵負討死
しけるを孫信ハ〳〵二軍の禍ハ
猶疑ず生ずるといへり是一つ宮れるに
来をへさ是二月八月に至りて帰と川中島
に出すへきとく士卒を悉く集め合戦

と問ふに夜ふる首と書きるしく知りぬ
を擇みわけ上中下の二等にその下策
と用ゆべしといそがしこれ如何いへる怪
みけるに孫信はいとく上策に成れ東を
もち不よく者を待べき策なりとて
く待設けしる而へ攻入るいとく勝へき中策
ハ数年浮議せしむ下策と用ひて海津
城を踏越へ西條山に陣し始く敗れ後巻と

待に先を死地に陥りたるやの信玄押
寄ハそこき勝敗を一時に決せへしの信玄
海津城に入らハ圍み攻んとする信玄川中島
に陣とりく吾軍諸を塞くるハ吾軍兩
宮の渡をわたらせ直に海津城にひしひて攻
やうに信玄必ず取ひ来るへしとて
又一戦しく叶ハそハ討死せへし先下策と有
ゆる謂まなりしく八月廿四日西條山に押入

陣したりけれども信玄後巻しく対陣せ
らるゝの度瀬川渡を越て海津城に入らり
ゝかくて九月九日暁遠江侍大将と集り的
日信玄心ゝに所おく戦ふべきよ今東雨宮の
渡と越て迂ゝしてきを示さと計へし用意
せよゝく寅刻列にゝく川中島よ云と押
おもを先陣ゝ材海和泉後陣ハ甘糟備後守果
しく十日の卯刻列ゝに信玄一万騎の云

と率る筑摩川に折くおを先手ハ要路に
待ゝ敵に遠信軍と進ゝく一ゝまりの
合戦とけむ謙信の旗本真ゝよりく切
越ゝ信玄ハ旗本と押廻ゝ甲斐ハ云計ゝく
者取を行ゝまかゝる義に西保山ハ甲州の軍
云一騎ゝけよ馳来ゝと見て遠信云とま
しめ勝と金くせゝれゝ甘糟備後守陣ハ
云と進ゝを見ゝく信玄の旗本踏破ゝる

り又紀伊之介廣瀬川源より引退く甘粕兵
より関く西川参より陣を引てく二月行て
引取れり　常山紀談

藩鑑巻之二百八十九目録

一部十二

上杉彈正大弼藤原輝虎